

大和の文化遺産を学ぶ ⑧—古代多胡郡の設立と石上麻呂

天理大学文学部教授
桑原 久男 Hisao Kuwabara

平成7年(1995年)に文化庁が始めた巡回展「発掘された日本列島」は、近年発掘調査された遺跡やそこから出土した注目の遺物などを紹介するもので、第26回となる令和2年度(2020年度)は全国5会場での開催となった。昨年12月、会場となった愛知県一宮市博物館を訪問する機会があり、各時代・各地域の代表的な遺跡・遺物を選びすぐった「日本の自然が育んだ多様な地域文化」、近年注目を集めた7遺跡を取り上げた「新発見考古速報」などの展示を見学することができた。

「新発見考古速報」のなかで、とくに興味深かったのが史跡上野国多胡郡正倉跡(群馬県高崎市)だ。この遺跡は、利根川の支流、鏑川が切り開いた広大な谷の中にあり、かねてから郡衙が存在すると想定されていた。平成23年(2011年)からの発掘調査で、ひときわ高い段丘上の場所から、東西16.8m、南北7.2mの大型建物跡が礎石が整然と並んだ状態で発見され、炭化米や多量の瓦が出土したことから、正倉(税として徴収した稲を保管する倉庫)の中でも格式の高い「法倉」だと考えられた。出土遺物から見ると正倉の創建年代は8世紀前半で、律令国家の税の徴収や地方支配の在り方を考える上で重要であるとして、令和2年(2020年)3月、国の史跡に指定された。巡回展の会場では、正倉跡の出土遺物のほか、正倉跡の北方約350mに位置する多胡碑の実物大模型が展示されていた。



写真1 多胡碑
(高崎市教育委員会提供)

多胡碑とは、古代多胡郡の設置を記念して和銅4年(711年)に建てられた石碑で、笠石・碑身・台石から構成されている。山ノ上碑(681年)、金井沢碑(726年)とともに上野三碑と呼ばれ、それぞれ国の特別史跡に指定されるとともに、平成29年(2017年)10月、ユネスコの「世界の記憶」に登録された。見事な楷書体で多胡碑に刻まれた80字の碑文は、『群馬県史 通史編2』

によると、次のようだ。「弁官符す。上野国の片岡郡・緑野郡・甘良郡から合わせて300戸を多胡郡として設置し、羊に給いて多胡郡と成せ。和銅四年三月九日甲寅に宣る。左中弁・正五位下多治比真人。太政官二品穂積親王、左大臣・正二位石上尊、右大臣・正二位・藤原尊。「羊に給いて」という部分をどう理解するかが難しいが、『続日本紀』でも、和銅4年(711年)3月、上野国の3つの郡から6郷を割いて別に多胡郡を置いたことが記載され、史書と碑文の内容が合致している点が重要だ。郡の設置を命じた朝廷の要人4名の一人として碑文に見える左大臣・正二位石上尊とは、柚之内火葬墓の被葬者の可能性があることを前号の記事で紹介した石上麻呂にはかならない。石上麻呂とはどのような人物だったのだろうか。

石上麻呂が、物部麻呂の名前で初めて史書に登場するのは、天武天皇元年(672年)のこと。壬申の乱の際、大友皇子の従者として最期まで付き添い、敗者の側になったものの、戦後の

朝廷で重用され、天武天皇5年(676年)10月10日、遣新羅使として派遣される。天武天皇13年(684年)、朝臣の姓を賜り、これを契機に物部から石上に改姓し、律令官人氏族への転身をはかったと見られる。持統天皇4年(694年)元旦には、天皇の即位の儀に際して物部麻呂朝臣として大盾を立て、文武天皇4年(700年)には筑紫総領、大宝2年(702年)に大宰帥に任じられた。和銅元年(708年)、石上麻呂が左大臣、藤原不比等が右大臣となり、和銅3年(710年)、平城遷都に際しては旧京(藤原京)の留守を務めた。和銅4年(711年)の多胡碑に左大臣・石上麻呂とともに名前が見える穂積親王は、靈龜元年(715年)に没している。養老元年(717年)、石上麻呂は78歳で没し、深く悼んだ天皇は政務を中断して、長屋王らを弔問のために邸宅に向かわせて従一位を迫贈する。『続日本紀』は、追慕し痛惜しない人はいなかったと記すが、葬地についての記述は見られない。そのゆかりの地に営まれた柚之内火葬墓が石上麻呂の墓地だったとしても不思議はないだろう。副葬された優美な海獣葡萄鏡も、麻呂の身分と経歴を見ればふさわしいものに思われる。

ところで、天理大学附属天理図書館の数多い貴重な書籍や史料のひとつに、奈良時代の公文書・太政官符(重要文化財)がある。宝龜3年(772年)12月19日、古代律令制において二官八省の頂点に位置する太政官が、神祇官に下したこの公文書には、不比等の孫、藤原百川の署名が見える。前年の9月17日、武蔵国入間郡で、租税の米を取めた正倉4棟が焼失した事件について、国司が卜占によってその理由を探ったところ、同地の神社に対する国からの供物がこの頃途絶えているので、土地の神が祟って火を發したとのお告げがあった。調べてみるとそのとおりなので、同地の神社への供物を再開せよ、といった内容だ。このような「神火事件」は、とくに奈良時代後期の東国で頻発したが、その真相は、正倉を管理した郡司や国司による稲の横領とその証拠隠し、政治の乱れにあることが次第に明らかになってゆく。史書や文書等には記録がないが、多胡郡正倉跡で見つかった炭化米は、このような正倉の焼失事件が同地でも発生したことを示しているのかもしれない。

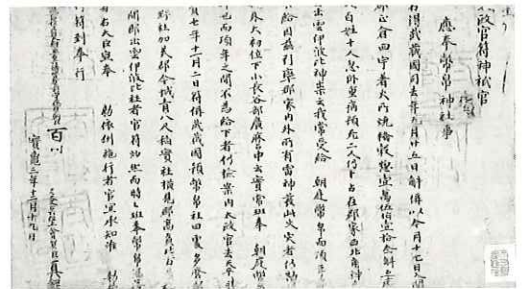


写真2 太政官符(天理大学附属天理図書館)

コロナ禍のなかでの開催となった昨年度の巡回展「発掘された日本列島2020」は、文化庁が「おうちでも楽しめる」解説動画をYouTubeで公開し、現在、視聴回数が34万回を越える人気ぶりだ。多胡碑についても、高崎市が作成したPR動画で現地の様子を知り、歴史的意義について学ぶことができる。現地を訪ね、実物を見るのが一番だが、コロナ禍を奇貨として作成されたこれらの動画は、オンライン授業に限らず、今後も教材として活用できそうだ。

コロナ禍のなかでの開催となった昨年度の巡回展「発掘された日本列島2020」は、文化庁が「おうちでも楽しめる」解説動画をYouTubeで公開し、現在、視聴回数が34万回を越える人気ぶりだ。多胡碑についても、高崎市が作成したPR動画で現地の様子を知り、歴史的意義について学ぶことができる。現地を訪ね、実物を見るのが一番だが、コロナ禍を奇貨として作成されたこれらの動画は、オンライン授業に限らず、今後も教材として活用できそうだ。